
幽霊の瓶詰

羅幻徒

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

幽霊の瓶詰

【Nコード】

N9067K

【作者名】

羅幻徒

【あらすじ】

女はネットオークションで”幽霊の瓶詰”を購入する。ただの気紛れだったが、アロマオイルと偽って夫の愛人に送りつけた。しかし、既に愛の醒めていた愛人は男にその小瓶を渡し、夫は持ち帰ったその小瓶を妻の前で使おうとする。

(前書き)

『幽霊の瓶詰がネットオークションにて18万円で落札 (http://www.afpbb.com/articled/life-culture/life/2707741/5471246)』
というネタをモトにしています。

女が今更ながらのため息を吐き出したのは、夜も更けた時間帯にさしかかったときだった。睡魔の押し掛かる瞼が腫れて、一重瞼を殊更重々しい表情に変えている。部屋の照明は消されており、唯一の光源はパソコンのディスプレイだけ。その状況も、愛嬌はあっても精彩に欠く女の顔を鬱々と見せていた。

その画面には、大手オークションサイトの商品ページが表示されていた。参考画像を見るだけでは、何の変哲もない小瓶が二つ並んでいるだけだ。問題はその中身で、洗剤のような毒々しい色の液体が怪しい光を放っている。ちなみに、現在の入札価格は十八万円台に届きそうな数値を示している。その最高額入札者の名前は、女がこのオークションに参加するために登録したアカウント名だ。自動入札機能が作動しているうえに即決価格が設定されていないので、時間切れになるまで落札価格は吊り上っていく。

十八万円台をカウントした最高入札額を見つめながら欠伸を漏らしている女は、既に諳んじられるほど見返した商品説明欄を見るために画面をスクロールさせた。

商品名は『【希少】幽霊の瓶詰』。イタリアの有名な心靈スポットで仕入れてきた代物らしく、地元のエクソシストが聖水でこの小瓶に封じ込めたものを譲って貰った、と記されている。そして、かなり凶悪な幽霊なので誤って解放してしまった場合の責任は一切取れません、と続いていた。何度読み返しても失笑を禁じえない。香水のミニボトル程度の小瓶に幽霊が収まるのかどうかは判らないが、むしろ、それほど凶悪な幽霊だというならエクソシストが安易に手放すはずなどないだろう、と女は考えていた。そして、それはこの女だけでなく、大抵のオークション利用者が思っているはずである。後日には、何処かのニュースサイトが面白おかしく記事にするだろうことも予想された。ともあれ、半年前に開設した女のネットバン

クには五十万円ほどの預金があるので、金額的な問題こそなかったが、開始価格は百円だったのだから、出品者はさぞかし笑いが止まらない思いをしているだろう。

突然、画面にメール着信を告げるポップアップが表示された。メーラーを開くと、落札おめでとうございます！ という妙に能天気な件名が女の目を刺す。見るまでもないと判断した女はメールをそのまま削除して、件のページをリロードした。オークションが終了しました、という文字に続いて、最高落札額の欄に十八万二千五百円という金額と女のアカウント名が並んでいた。

その金額を無表情に眺めた女は、自嘲するように嘆息を漏らした。ネットバンクの預金額は、結婚十年目を祝おうと女がパートに出て貯めた金だった。夫の収入を遣り繰りして貯めることもできたのだが、専業主婦である自分から夫へのプレゼントという名目が欲しいと思ったのだ。十年近いブランクは思った以上の苦労を女に強いたものの、それでも毎日勤め上げられたのは偏に夫への真摯な愛情があったればこそ。通常利用の口座とあえて分けたことも功を奏し、半年で五十万余円の貯金は十分に自慢できる努力の賜物だろう。ただ夫には話していなかったのが驚かせることになるだろうが、喜んで有給を都合してくれるはずだ。そして、この貯金で旅行に行こう。夫は常から海外旅行を夢見ていたが、これだけの金があれば決して夢ではない。そう女は一人心を躍らせながら、考えていた。一カ月前のあの日までは。

それは、帰宅した夫のスーツの手入れをしていたときだった。ポケットに入れっ放しになっていた携帯が落ち、その衝撃でコンパクト型の携帯が開いてしまった。破損がないかと慌てて拾ったのも束の間、偶然だろう開いた発信記録を見て愕然とってしまったのだ。会社の同僚に混じって並んだ、あからさまな女名前。反射的に開いたメールフォルダにも、同じ女名前のものが着信、送信済みに関わらずずらりと並んでいた。

女は、夫の携帯の中身を見たことはなかった。テレビではよく夫

の携帯を覗き見て離婚騒動に発展する妻の行動を放送していることがあるが、それは女にはデリカシーを疑う行為としてしか映らなかつた。夫婦といえどもプライバシーはある。結婚当初その区分だけはきっちり付けると約束したこともあつたが、何より、女の妻としてのプライドが夫の私物を詮索する行為を許さなかつた。女には、夫に愛されている、という自信もあつた。

それなのに、と女が齒噛みしたのは想像に難くない。実際に、携帯には女の知らない親しげで艶めいた名前があるのだ。もしかしたらパソコンの方にもこの女は生きているのかも知れない、と考えても無理はなかつた。妻が無邪気に結婚記念日の計画を立てている間、その計画のために慣れないパートで苦勞している間、夫はこの女と淫らな逢瀬を重ねていたのだ。

その翌日、女は体調不良を理由にパートを辞めた。折角慣れてきた頃で、上司も同僚も随分惜しがってくれたものだが、女には既に働く意欲も理由もなくなつていた。貯金の使い道も、当然夫のために使う気にはなれず、ネットバンクの口座の中に放置したままとなつた。

そして今日、そのネットバンクを解約してしまおうとパソコンを立ち上げた。預金は手付かずのままだったが、惜しいとも感じなかつた。むしろ、この五十余万と共にあの女も消えてくれればどれだけいいだろう。実際に消えるはずなどないのだが、少しは気が晴れるのではないかと考えたのは、随分歪曲した八つ当たりだ。実際には、夫の携帯には今もあの女の名前が並んでいるというのに。

ネットバンクのトップページに張られたリンクを辿つたのは、ほんの気紛れからだつた。口座の解約ならいつでもできるし、ネットオークションというのがどういふものなのか興味もあつた。散財してみるのも悪くない。特に何が欲しい訳ではないけれど、無駄遣いだと思えるものでも、その方が自分の努力に対する褒美にはなる。そのくらいの安易な思いつきだつた。

その結果が『幽霊の瓶詰』とはね。女は鼻で笑いながら、購入手

続きをするべくリンクボタンをクリックした。

その小包が届いたとき、彼女は不自然な印象を感じていた。宛名は確かに彼女のものだったが、差出人欄に書かれた名前に見覚えはない。企業名らしいということは察せられるが、やはり見たこともない名前で、開けることすら躊躇われた。

そんな彼女の警戒心を軽減させたのは、品名の欄が『アロマオイル』になっていたことだろう。彼女はアロマオイルに凝っていて、本やネットで調べて色々試するのが趣味となっていた。この小包もすっかり失念しているだけで、ネットか本で注文したものかも知れない。メール便の封筒に似たものなので、カタログという可能性もあるだろう。差出人名に見覚えがないのは、企業名を変えたからなのかも知れない。

まさかね、と彼女は呟きながら、その包みを開けてみることにした。もし問題があるようなら送り返せばいいだけの話で、料金を取られるようならばクーリングオフを盾にできる。

しかし、箱を開けた彼女に待ち受けていたのは更なる違和感だけだった。まるで百円ショップの寄せ集めのような梱包材に、パソコンで出力したと判るチープな説明書。しかも、その内容は素人が雰囲気を実感ただけだと判る程度の文章なのだから、迷わず返品、という気にさせるには十分だった。

だけど、と彼女は考える。請求書の類はなく、幼稚な説明書きにも金額の類は明記されていない。そこには、当社でブレンドした新しいタイプのアロマオイルです、とあるだけだ。使用感をお寄せください、とサイトとメールのアドレスなどが添えられているのも好感へと転じさせた。

そうは云っても、という具合に彼女は苦笑を漏らした。箱の中には小さな瓶が一つだけ、しかもとてもアロマオイルとは思えない液

体の色をしているのである。まるで絵の具を溶いたような色を見るだけで、とても癒しの効果を期待できそうにはなかった。こんなを使って気分が悪くなったら、と不安を感じずにはいられなかったが、即座に捨ててしまうのも惜しい気がした。何より、不燃ゴミの回収は三日も後だ。

と、不意に思い出したのはある男の顔だった。ほぼ一日置きに訪ねて来る男。部署の違う会社の先輩で、背が高く、面立ちの整った見栄えがいいうえに人当たりも柔らかい男だ。当然女子社員からの受けがよく、結婚していてもいいからお付き合いしたいタイプ。そんな男と愛人関係になって、既に一年が過ぎようとしている。

確かに、男との付き合いは彼女にある種の優越感をもたらした。仕事もできる彼は上司の覚えもよく、そしてとても真面目だった。残業も厭な顔一つせず、どんな繁忙期でも笑顔を崩さない。そんな彼に昼食に、更には酒に誘われ、いつしかホテルの部屋をリザーブするまでなったのだ。社員同士、しかも彼が既婚者という手前、誰にも云えない関係ではあったが、その状況が却って二人の痴情を焚きつけた。彼とお近づきになりたいと思いつけている幾人もの同僚と話していると、暴露したくなる衝動を感じずにはいられない。

しかし、そんな衝動を感じたのも半年ほどの間だった。今ではすっかり、彼女の熱情は冷め切ったものとなっている。メールや電話での連絡は相変わらずこまめなほどに続けているが、それはあくまでも情性の産物と、職場を同じくする義務感からでしかない。最近では文言にすら苦勞するほどで、ネットの海の中から探し出した恋愛小説の一節をアレンジして、ときにはそのまま引用して返信するに至っている。

付き合い始めて間もない頃、男と一泊二日の旅行をしたことがあった。男は出張という建前を妻のために用い、会社には有給休暇を申請して妻と旅行に出かけたことになっていた。男は旅程にも細心の注意を払い、移動は全てレンタカーで行った。自らの運転という行程の気候さを満喫するという理屈もあったが、その実は、新幹線

や飛行機では出張組の同僚の目に触れる可能性があったからだ。男はとても楽しげだったが、しかし、彼女にとつては男の思わぬ一面を見つけて愕然とさせられる出来事となった。

男の意外な一面とは、過剰といえるほどの独占欲だった。会社ではおくびにも出さなかったそれは、二人きりになった車中で遺憾なく発揮された。彼女がそつぽを向くという行為が許せないらしく、車窓を流れる風景すら見ることを拒んだ。彼女はその間、ずっと彼の運転を凝視していなければならぬ。その分男のお喋りに花は咲いたが、彼女の記憶には道中の景色がさっぱり残らないという妙な旅行となった。宿泊先でも同様で、男は彼女が一人で温泉を堪能する余裕すら味わわせなかった。旅行から戻った翌日、気疲れしてしまつた彼女は本当の体調不良を理由に欠勤している。

それほどまでに私を愛してくれているのだ、という幻想を抱けていたうちはよかつた。彼女自身も彼を心から愛していたし、そんな行き過ぎた独占欲にすら幸福を感じられた。だが、男に離婚する気がないと判り、それでも彼女との関係を深め、むしろ彼女の生活に深く喰い込んでくるようになったとき、彼女の愛はいともあっさりと終わりを告げていた。

その事実を男は知らない。けれど、そのことを彼に告げる勇氣は彼女にはなかつた。同じ会社に勤めている以上、彼との関係はさよならだけでは済まされない。会社にいれば彼がいて、彼を噂する同僚達がいる。それが彼への愛情をぶり返すことにはならないだろうという確信すらあるのだが、それより、上司を味方に付けた、独占欲の塊である男がどんな行動に出るのか判らないのが怖かつた。

社内恋愛なんかするものじゃない、と云つた同僚の言葉が胸に来る。今更と思ひながらも、手の中の小瓶を弄びながら、慰めを求めようと考え出すと止まらなくなつていた。

そつだ、と彼女は改めて小瓶を見つめた。この胡散臭い代物を彼に押し付けてしまふ、というのはどうだろうか。

彼女の家に当たり前のように押しかけている男は、彼女がアロマ

にはまっていることを知っていた。香炉を使って部屋に香りを焚きしめたり、バスアロマを楽しんだり、香水の代わりにアロマオイルを使っていることを知っている。最近、男は疲れが溜まっていると零していたから、さり気ない甘言に添えて渡せば、遠慮すら見せないだろう。万が一見た目通りの粗悪品だったとしても、試供品だったことや、疲れ過ぎていて効果が強過ぎたのかも知れない、とでも云えばさほど問題にはならないはずだ。

彼女はちらりと壁掛け時計を見上げ、男が残業だとメールしてきたのを思い出す。まだ二時間は姿を見せない。

久し振りに手の込んだ料理でも作ってあげようかしら、と彼女が思ったのは、早くも悪戯を成功させたような気分になっていたからだった。

見慣れた玄関のドアに、男はやっと仕事から開放されたような気分を味わっていた。首をぐるりと回すと骨の擦れるような音がして、少しだけ凝りが解れて肩が軽くなる。彼の妻は音を鳴らすのは逆に関節の負担になるのだと眉を寄せていたが、一番手っ取り早いリラックス法なのは確かだ。心の何処かから沸き起こる年寄り臭いという自嘲は、ため息と共に吐き捨てる。

インターフォンを鳴らしてからドアを開けると、女が玄関に出てきて男を迎え入れた。最近はお迎えにも時間を要するようになっていたが、今日は待つていたとばかりの反応だ。

彼女は男の妻ではなく、会社の同僚で、既に一年ほど関係が続いている愛人だった。部署は違うが男友達の間で噂になるほどの美人であり、誰が最初にものにするのかを密かに競い合っているほどだ。建前上は誰も勝者となり得ていないレースだが、彼女の話が出る度に男の全身が優越感に満たされるのは云うまでもない。

脱いだ上着を受け取る女から、空き腹を刺激する匂いが漂ってき

た。女の常用している花のアロマオイルと、スパイスの香り。男が小さく鼻を鳴らすと、ビーフシチューを作ったのよ、と女は殊更嬉しそうに声を裏返した。

その香りは、リビングを存分に満たしていた。対面型のキッチンの向こうに圧力鍋があり、そこが匂いの発生源だろうと見当を付ける。女はすぐにキッチンの方へと入って行って、その鍋に玉じゃくしを差し入れた。

男の妻は和食を得意としていた。妻の料理が決して口に合わない訳ではなかったが、洋食が得意な女の料理は洋食の方を好む男の口を十分に楽しませた。しかも、女は研究熱心で、新しいレシピを見つけてきては男に披露してくれる。最近は仕事が忙しいこともあって、女が手間隙かけた料理を作る機会は減っていたが、こうして料理をしてくれる日があることを男は好ましく感じていた。完全な満足とは云い難かったが、それ以上の期待は自重していた。彼女は、あくまでも愛人なのだ。

男は、女に離婚はしないことをはっきり告げていた。女も結婚には特に興味がないようで、多少残念がってはいたようだが、割り切った関係を楽しんでいる風だった。実際、同じ職場で働く者同士が誰にも知られない逢瀬を重ねていくスリルは格別だ。当然、彼女もその興奮を味わっているはず。楽しんでいからこそ、駆け引きが成立するのだ。

男は、今日はこの家に泊まっていこうかと考えていた。妻には会社の近くのホテルに泊まったと云えばいいし、過去にも数度そうして外泊したことがあった。疑うことすらしない妻は、その度に男の健康を気遣い続ける。そのときに抱く罪悪感が、男をこの女の許に通わせている要因の一つでもある。

しかし、明日はその感覚を味わえないようだ。

食べ終わった皿を脇に押し退けながら、女は、今日は帰った方がいい、と云ったのだ。何故かと問えば、結婚記念日が近いでしょう、と小悪魔の微笑を浮かべて見せる。忘れていた訳ではなかったが、

女から指摘されるとも思っていなかった男は、僅かに口籠りながら、グラスに残った赤ワインの喉に流し込んだ。

不意に女が席を立て、寝室へと引つ込んだ。かと思うとすぐに出てきて、小さな袋を男の手に握らせる。中身を尋ねると、アロマオイルだという答えが返つて来た。疲れている顔をしているから、家に帰ってゆっくり休むべきよ。

アロマオイルはバスアロマとして使ってもいいし、ベッドサイドで使うのも効果的だ、と女は話した。そして、僅かに表情を翳らせながら、素敵な香りだから奥さんもきつと喜ぶだろう、とも。

女の可憐しい仕種に男は情欲を感じた。感じはしたが、今夜は素直に帰ることにする。この埋め合わせは後日、結婚記念日が済んだ後ですればいいだけだ。その頃には仕事も一段落しているだろうから、また旅行に行くのもいいかも知れない。男の頭の中は、既に旅の風景が女の姿と共に彩られていた。

手渡された上着の袖に腕を通してから、改めて女の寄越した袋を受け取った。受け取りながら、女の唇に唇を重ねる。ワインと塗り直された口紅の味に、男はもう一度女の唇に吸いついた。

女の家を出てタクシーを拾うと、男はポケットの中に入れた袋を引つ張り出した。開けて見ると、中には飾り気のない小瓶が収まっている。女のコレクションであるアロマオイルは遮光瓶という色付きのものが多かったが、これは透明で、中の液体がすっかり見えていた。随分派手な色だと思つたが、女のように知識を得ている訳ではないのでこういうものもあるのだろう、と感じただけだった。実際、芳香剤の類にはこういう奇抜な色のものが多いものだ。

どんな匂いがするのだろう、という好奇心が沸いたが、男は蓋を開けることはしなかった。アロマオイルは香水と違って薄めて使うものだ、と以前女が云っていたのを思い出したからだ。何より、一度だけ瓶の口から直接嗅いだことがあつたが、鼻が曲がりそうなほど強い香りだつたことを憶えている。この狭いタクシーの車中で開けてしまつたら、酷い思いをするだけだろう。

家の前で止まったタクシーに料金を支払いながら、男はこれからのことを考えた。夕食を済ませてしまった侘びに、久し振りに一緒に入浴するというのはいい案じゃないだろうか。仕事に忙殺されていて、最近はずっと彼女とも夜はご無沙汰だった。

ただいま、と声をかけながらリビングに上がると、ソファでうたた寝をしている妻の姿を認めた。キッチンの方へ顔を向けると、食事がきちんと用意されている。そういえば残業する旨の連絡をいれていなかった、と思い出し、腹は減っていないが少しは食べておこうか、と考えた。

ソファに横たわる妻の肩を軽く揺ると、洗面を作りながらも、お帰りなさい、と呟いた。連絡しなかったことを詫びた男は、身を起こした妻に食事は済ませたのか、と逆に問う。緩慢に頷いた妻を見届けると、自分も既に済ませたことを告げながら、それでも少し食べることにするよ、と告げる。そして、食べた後で一緒に風呂に入ろうか、と耳元で囁いた。

付き合うわ、と云う妻と共に食卓を囲んだ男は、仕事の話をし、同僚から仕入れたオープンしたばかりのフランス料理店の話をし、結婚記念日に行ってみようか、と云った。妻は寝惚け眼をしばたたきながらも、楽しみだわ、と返し、何を着て行こうかしら、とビールのグラスを傾ける。じゃあその前に服を見に行こうか、と男は云いながら、少し調子がよ過ぎるだろうか、と心の中で自戒した。

食事を終えた男は、妻を誘ってバスルームへと向かおうとした。しかし、妻は既に入浴も済ませてしまったからと男の腕をすり抜け、お皿を洗って待ってるわ、とアルコールで火照った顔を妖艶にほころばせた。思惑を損ねかけた男は、その微笑を受けて満悦顔でバスルームへと踵を返す。

女のところでワインを開けた後だったからだろう、男は酔いが回ったことを自覚していた。まだ足取りに乱れはないものの、肝心のベッドでは早々に寝込んでしまいそうだ。これはゆっくり湯に浸かって、アルコールを抜くべきかも知れない。

と、浴槽の脇に一つの小瓶が置かれていた。何処かで見たと思つたのも束の間、そういえば女が持たせてくれた物と同じではないかと思ひ至る。ラベルこそないものの、瓶の仕様といい、入浴剤のよくな色の液体といい、まるでそっくりな代物だった。唯一、辛うじて差があるとすれば、ここにあつた物の方が容量が僅かに少ないということだろう。妻が先に使つてみたのだろう。

しかし、と男は思う。同じ物がここにあるということは、世間でかなり流行つてゐる代物なのではないか、と。特に妻はこういう類には疎く、唯一愛用しているのが、男が数年前に誕生日に送つた有名化粧品メーカーの香水だけだ。男が以前アロマオイルの話をしたことを憶えていて、妻は気にしていたということか。

可愛い奴だ、と一人微笑を浮かべながら、男は小瓶の蓋を開け、中身を湯の中に垂らし始めた。

バスルームに姿を消した夫を見届けた女は、思わずやりと口元を歪めていた。バスルームには、あの小瓶が置いてある。以前、香水よりもアロマオイルの方がいい、という話をしてきたから、珍しい物好きな夫はすぐに喰いついて来るだろう。

とはいえ、妻は未だに、あの小瓶の中身が本物の幽霊だとは信じていかなかった。けれど、全く否定する気にもならなかった。払つた大金のせいかも知れないが、心の何処かで本物だと信じたい自分がいるからだろう。

夫の愛を取り戻すことができれば、確かに万事収まることだ。しかし、他の女を抱いた腕が汚らわしく、他の女と重ねた唇がおぞましく、他の女を貫いた慢心が許せなかった。しかも、自分をそんな夫を信じる貞淑に凝り固まっている妻と信じ切つてゐることが腹立たしい。

ならば離婚を、と考えたことはある。現に、離婚届さえ用意して

あるのだ。記入が必要な場所は悉く埋め尽くされ、あとは夫の署名を待つばかりになっている。キッチンを引き出しの裏に忍ばせ、いつでも夫に突きつけられる状態だ。

だが、実際に離婚などできるだろうか。寝耳に水の夫は、最初は狼狽するだろう。自身は完璧な夫を演じ切っていると信じており、完璧な家庭を営んでいるという自信すら窺える。子宝に恵まれなかったのは残念だと零すことはあっても、それは両親や親戚のいる手前での話であり、もともと子供には興味すら持っていない。初夜の前、夫ははつきりと云ったのだ。子供はうるさいだけだから産まないでおこう、と。あのときは、自分も新婚生活が長く続くと純粹に喜んでいたが、もしかしたら、夫には既に情婦との淫靡な生活があったのかも知れない。

何より、離婚をした後の自分に何があるのだろうか、という考えが女を立ちすくませていた。収入を夫に頼って生きてきたこの十年。結婚前に職に就いた時期があつたにはあつたが、何のために就職したのだと嫌味を云われるほど短期間で離職した。今となっては、先のパートの経験が女を更に不安にさせる。半年で五十万の貯金は立派な額だ。しかし、それは生活費が削られなかったからできたことに他ならず、夫に内緒という前提があつたとはいえ、まともに就業したとしてもどれほどの収入が見込めるだろう。悲観するほど過酷ではないだろうが、樂觀できる保証は何もない。

離婚が成立すれば慰謝料は入るかも知れない。しかし、夫が離婚を簡単に承諾するとも思えない。むしろ、自尊心の塊である夫が、突きつけられる離婚届をすんなり受け取るとも思えなかった。

ならば　ならば、夫が死ねば、死んでくれれば私は自由になれるのでは。

そう思い至った自分を恐ろしく感じる。とはいえ、その安易な空想に愉悦を感じるのも事実だった。そして、その空想をほんの少し演出してくれるのがあの小瓶。

そんな空想に、十八万も注ぎ込んだなんて。

自嘲が漏れた瞬間、不意に背筋に震えが走った。洗いかけていた皿を取り落としそうになって、更に冷や汗が吹き出る。この食器は夫の母から贈られたもので、一枚たりとも欠けさせる訳にはいかないのだ。

物音に振り返るとバスローブを羽織った夫がいた。濡れた髪をバスオールで拭っている姿は、全くいつもと変わらない。どころか、不遜なほどの笑みを浮かべながら、ベッドに行こう、と囁いてくる。やはり、幽霊の小瓶などただの座輿だったということか。

夫は焦れたように、最後の皿を拭いている女の背後から抱きついた。その瞬間再び走った怖気に、女は風邪でも引いたかしら、と一人ごちる。ソファーでうたた寝したあとのアルコールで、躰を冷やしてしまったのかも知れない。

ベッドで温かくしていれば治るよ、などと調子のいいことを云う夫に連れられて、女は寝室へ向かった。確かに、暖かいベッドは魅力的だった。すぐに就寝することは許されないとしても。

夫がぞんざいな仕種で髪を拭いている後ろで、女は服を脱ぎにかかった。夫は服を脱がせるという行為にこだわる方だが、妻が率先して服を脱ぐ行為も嫌いではなかった。機嫌が悪いときは怒り出すことすらあるのだが、今日の機嫌は上々のようだ。早々と下着姿になる妻を横目に見ながら、口元を楽しげに緩めている。

そうして女がベッドの中に潜り込んだのを見届けた夫は、部屋の照明を消してベッドサイドのテーブルスタンドのスイッチを入れた。ステンドグラス様のシェードに照らされた壁や天井が淡い七色に染まる。何度見ても悪趣味だ、と女は心の中で呟いた。

と、夫がバスローブのポケットから何かを取り出すのが見えた。すっぽりと手に隠れてしまうほどの何物かで、女は覗き込むために身を起こした。

夫の手の中には、あの小瓶が握られていた。しかも、あの女のもとに先日送ったばかりのラベル付きの物。女は愕然とする思いで夫の手の中の小瓶を見つめ、ついで夫の顔を信じられないものを見る

ように仰ぎ見た。

驚いていると判る妻に、夫がしたり顔で微笑んだ。

突然、女はテーブルスタンドに掴みかかった。脇に置かれていた置時計が転がり落ち、コードが伸び切ってコンセントを引き抜いた。室内が真っ暗になる。その暗闇の中で、女はテーブルスタンドを振り被り、同じ勢いで振り下ろした。ガラスの碎ける音と、夫の悲鳴が混じり合う。

呻きに変わったその声を目指して、女はもう一度テーブルスタンドを振り下ろした。

(後書き)

ご精読アリガトウございました。

ご意見・ご感想・ツッコみなどは遠慮なくお願いします。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9067k/>

幽霊の瓶詰

2010年12月31日22時55分発行